

世界を救った姫巫女は

登場人物 紹介

マリウス

理世がトリップした国の神官。
守り人の一人で、
外見は美しいが性格に難あり。

おかみ

港町で宿屋を営む老婆。
いつもしかめっ面を
している。

テオバルト・デツェン

理世がトリップした国の騎士。
守り人の一人で、
理世の想い人。

ルーカス

理世がトリップした
国の第三王子。守り人の一人で、
変わり者として有名。

テレーズ・コルネリウス

美貌の女騎士。
理世のピンチを救い、
旅の護衛を申し出てくれる。
背が高く、誰かに
似ているのだけれど——？

ありさわ りよ 在澤理世

中学生の頃、突然異世界に
トリップしてしまった平凡女子。
浄化の力を持ち、護衛の守り人達と
7年に及ぶ旅をしていた。
世界を救った今、「姫巫女」と
呼ばれているのだが、
フラれたショックで一人旅に出る。

目次

世界を救った姫巫女は

7

番外編 幸せに暮らしましたとさ

269

世界を救った
姫ひめ巫み女こは

プロローグ 「あなたのそばにさせて」

「かわいいし、いくらでも甘やかしてあげたいけど——女性としては、少しね」

そう言ったのは、長身の騎士。彼の言葉に、騎士の親友でもある第三王子が答える。

「確かに、あの見た目ではな」

「せめてもう少し身長が高ければ……。いくつ違うと思う？ 四十センチも差があるんだよ。妹ど

ころか……。子猿にしか見えない」

その言葉を聞いた瞬間、世界を救った姫巫女は凍りついた。

七年前、この世界にトリップしてきた在澤理世。浄化の力を持ち、六人の守り人達とともに世界を救う旅に出て、ようやくその役目を終えた。

そして世界を救った姫巫女が褒美に望んだのは、愛しい騎士との結婚だった。

守り人の一人でもあるその騎士は、今ほど理世を「子猿」と形容した彼である。

王城の廊下の角で騎士と王子の会話を聞いていた彼女は、背に触れる壁の冷たさに、ぶるりと震

えた。

旅を終えて、ようやくできた落ち着いた時間。

気分転換に城内を散歩していると、見慣れた二人の姿を見つけたのだ。そうだ、驚かせちゃえ、

なんて小さな悪戯心で忍び寄ると、話題の中心に自分がいることに気付いた。そして慌てて隠れた

ところ、聞こえてきたのが先ほどの会話だった。

騎士と第三王子は、いつも通りの穏やかな顔で、理世が一度も聞いたことのない本音を吐き出し
ている。

「救世の褒美に望まれたのが結婚とは。希代の色男め」

「よしてくれ。アリサは、近くにいた大人に寄りかかりたかっただけだよ」

アリサ——それは、この世界での理世の呼び名だった。理世は、びくりと肩を震わせる。

「大人だと？ おい。地位も名誉もある私だっつてそばにいただろう」

声を少し荒らげた第三王子に、騎士は呆れた声を出す。

「君は、性格に難がありすぎたんだな」

盗み聞きがよくないことなど、百も承知だ。

しかし、長年慕い続けた人が自分の話をしている——そう思うと、この場を離れることができなかった。結果として、知りたくなかった事実が明らかになってしまったわけだが。

「テレーズはどうするつもりだ」

「彼女にはご退場願うしかないだろう」

「美女なのに、残念だな。アリスの求婚を断るといふ手は？」

「……陛下の勅命をいただいている。首と胴は、まだ繋げていたいからね」

この時、理世は初めて知った。想いを寄せる彼に、恋人がいることを。

テレーズという名のその女性を、しかし理世は見たことがない。

呆然としてみると、騎士の声が響いた。

「異世界からやってきたアリスは、ここでは一人ぼっちだ。彼女は本当によく頑張った。見知らぬ土地でただ一人、浄化の力を持つという理由だけで、世界中を旅して邪気を祓ったんだ。彼女の功績に、この世界の住人として報いなければ」

拒絶にしては優しく、求愛と考えるには苦い彼の言葉。

理世は、ぎゅっと拳を握り締める。

そして壁から背中を離し、彼らに気付かれないように、そっとその場を離れた。

「はぁーあ。初恋は実らない、かぁ」

ぐんと大きく伸びをする。視界に入った空が青くて、涙が滲みそうだった。

この圧倒的に大きな空が、自分をどこまでも見通しているようで――

幼い頃、悪さをするたび、母に「お天道様は見てるのよ」と叱られたことを思い出す。

これは、悪いことをした罰なのだ。盗み聞きなんてしなければ、本音など知らずに済んだ。その

ままきつと、世界で一番幸せな花嫁になれたのに。

「旅にでも出るかぁ」

理世は笑った。空だけが、彼女の頬を伝う滴を見ていた。

第一章 ありのままの私で

世界を救った姫巫女である少女——在澤理世は、中学二年生の時にこの世界へトリップしてきた。その日はひどい悪天候で、豪雨により視界は悪く、地面を叩きつける雨音以外はほとんど何も聞き取ることができなかった。そして理世は下校の途中、横断歩道を渡ろうとして信号無視のトラックにはねられ、命を落としたのである。

幸いにして痛みを感じるよりも早く気が遠のいたため、死の恐怖を味わうことはなかったのだが——死んだはずの理世は、天国よりもずっと縁のない場所で目を覚ました。そう、彼女は異世界にトリップしたのだ。

彼女がトリップしてきた世界は、地表から湧き上がる邪気に長年悩まされていた。農作物は邪気を吸い込み成長を妨げられ、動物は狂暴化し、草花や樹木は枯れていくばかり。何をしても効果がなく、世界は緩やかに、しかし確実に崩壊へ向かっていたという。

そこにやってきたのが、突如空から現れた謎の侵入者——理世だった。高いしぶきをあげて王城の噴水に落ちた彼女は、濡れ鼠ならぬ濡れ子猿。

ずぶ濡れの理世を、衛兵達は瞬時に拘束した。しかし、王城で起こった異変に気付いて、神殿から大急ぎで駆けつけた神官の言葉を聞き、彼らは震え上がることとなった。この不審極まりない濡れ子猿が、周囲に立ち込めていた邪気を消したのだと言う。衛兵達は一変して大騒ぎ。一方の理世は、ただ震えていた。鈍く光る鎧を身につけ、鋭い剣を手にする男達を見て、口もきけないほどに怯えていた。

なんとか理世をなだめた後、城の人々は彼女に対し、時間をかけて丁寧にこの世界について説明をした。その甲斐あって、理世が自分の身に起きたことを理解し、受け入れ始めた頃には、自分がこの世界でただ一人、浄化の力を持つ存在なのだと自覚した。

民に崇められ、遣いの者達にかしずかれ、浄化の姫巫女などという仰々しい二つ名まで持つことになるとは——。誰よりも戸惑ったのは理世本人だ。毎日、制服のプリーツを気にしながら登下校に勤しんでいた中学生にとつて、想像すらできない展開である。

その後は、理世があれこれ思い悩む暇などないほど、とんとん拍子に話が進んだ。なんとか引き出せた条件——日本に帰る術を探してもらおうことと引き換えに、理世は守り人と呼ばれる男性六人の仲間と共に、世界中を旅して回ることに。

ロバや馬車、時に船でめぐった距離は相当なものとなり、理世があまねく世界を浄化し終えた頃には、七年もの月日がたっていた。

日本人とはまったく違う顔立ちの人々にも、すっかり慣れた。そして、イケメンにも。理世の六人の守り人は皆飛び抜けて美しい。

この国の第三王子と、その側近の騎士が二人。さらに、将来有望な神官、博識な学者、旅の記録をまとめる吟遊詩人。彼らは理世に甘く、優しかった。唯一、苦しめられたことと言えば、日本にいた頃と同じく、勉学である。

相手の言うことを聞き取って理解し、自らもこの世界の言葉で話す能力は、なぜかはわからないが最初から備わっていた。会話をする時は、どうも自動翻訳のような機能が働いているらしい。しかし、文字を読んだり書いたりすることはできない。「読み書きのできない姫巫女など言語道断」と、天使の笑顔で神官に詰め寄られ、早々に文字を叩き込まれた。平凡な中学生らしく、やる気のない態度で授業に臨む理世に、神官は一切手加減しなかった。彼女が中学校で使っていた辞書より分厚い手帳まで渡し、この言葉で日記を書くように彼は命じた。

理世は悲鳴を上げながらも、毎日欠かさずそれを開き続けた。効果は著しく、日を追うごとに文字を綴ることが楽しくなっていく。黒い表紙の手帳は、中身も真っ黒になっていった。一年が過ぎる頃には、日記を書くことが理世にとっても欠かせない日課となっていた。内容は、他愛のない日常の出来事や、心に秘めた想いの数々。——理世は、守り人の一人である騎士、テオバルト・デツェンに恋心を抱いていた。

テオバルトは、誇り高く実直で、六人の中ではことさら理世に甘い人物だ。幼く恋に初心であった彼女が心を奪われるのに、そう長い時間はかからなかった。

彼の優しさも甘さも、自分にだけでもたらされる特別なもの。

理世は、そう信じて疑わなかった。

けれど旅が終われば、日本に帰らなければならぬ。

理世はいつしか、テオバルトと離れたくないと思っている自分に気付いた。

浄化の旅から帰城して三日。ようやく人心地がつき、国王と面会する場を与えられた理世は、救世の褒美を変更したいと申し出た。

日本に帰る道ではなく、テオバルトのそばにいたいことを望んだのだ。彼の心にも、自分と同じ感情の炎が宿っていると信じたまま。共に謁見の場にいたテオバルトが、理世と目が合った時にほほ笑んでくれたのも覚えている。

しかし、彼は先ほど気安い言葉と笑顔で、理世の恋心を粉々に砕いた。それは理世に直接向けられた拒絶ではなかったけれど、彼女にとって、青天の霹靂だった。

テオバルトの優しい手が、慈しみに満ちた目が、彼と接した時間全てが、理世に愛情を感じさせた。

けれど、それは、彼の中で恋ではなかった。

——恋ではなかったのだ。

何しろ理世は、彼にとって子猿でしかなかったのだから。

身長一九〇センチの彼にとって、一五〇センチにも届かずマッチ棒のように細い理世は、幼い少女という認識でしかなかったのだろう。七年にも及ぶ浄化の旅を終え、理世が二十一歳、テオバル

トが二十六歳となっても、何も変わらなかつたのだ。

恋愛対象になれず、さらに彼には恋人までいた。泣いて日本に帰りたところだが、帰り方も、帰れるのかさえもわからない。

加えて、褒美の変更を取り消してくれとは言い出せない空気が理世を取り巻いていた。世界を救った姫巫女の願いを早急に実現すべく、城中が手配に大忙し。しかも、本来は王族のみに許された王城内での結婚式も、特別に執り行う許可が下りている。理世の手に負える段階など、とつくに超えていたのだ。

理世は焦り、戸惑い——そして、衝動に任せた。

城の者にも、守り人にも何も告げずに、置き手紙一枚だけを残して王城を抜け出した。

* * *

「うわあ……人が近い」

隣を通り過ぎる男性に首を傾げられ、理世は慌てて口を閉じる。

赤い煉瓦の建物が並ぶ街並みは鮮やかで、心が弾んだ。どこからでも見える大きな白亜の城を振り返り、にっこりと笑う。

理世は今、その白亜の城を抜け出して、にぎやかな城下町を当てもなく歩いていた。

王城の噴水にトリップして以来、ずっと嚴重に守られてきた理世にとって、街を一人で歩くのは初めての経験である。

また理世のそばにはいつも守り人がくっついていて、警備上任方がなかつたとはいえ、どの街に行っても住人との距離は遠かつた。

旅の初めこそ、浄化の姫巫女を周知させるため顔をさらしていたのだが、その存在を神秘的で高貴なものにするため、いつしかヴェールをつけるようになっていった。

人々と直接会話をすることもめつたにない。いつも分厚いヴェール越しに、街や人を見ているだけ。空はいつもくすんでいて、手を伸ばして触れられるのは守り人の手だけだった。

だが今は、こんなにも自由で、何にだって触れるし、どこにでも走っていいける。

「よーい、どんー!」

理世は勢いをつけて走り出した。両手を前後に大きく振って、大股で駆けていく。心臓が激しく脈打っている。内臓が揺れて苦しくて、肺も痛い。汗をかいた足はジンジンと痛む。それでも走るのを止めなかつた。

「はあっ……はあ、はあっ……気持ちいいっ!」

汗を拭いて理世は笑う。

気持ちよかつた。

自分の足で駆け出したこの瞬間。誰かに乗せてもらう馬よりも、豪華絢爛な馬車よりも、日本に

いた頃は当たり前だったこの感覚が、ずっとずっと尊く感じた。

そして、理世が一番嬉しかったことは――

「なんだお嬢ちゃん、きれいなおべべ着てそんなに走って。急いでんのかい？」

「うんっ、ちよつと、向こうまでっ……！」

「人にぶつからんように気をつけるよ」

声をかけてきた恰幅のいいおじさんが、じゃあな、と笑う。大工仕事の途中だったのだろう。彼は理世に手を振ると、道具を抱えたまま足早に去っていく。その大きな後ろ姿を、呼吸を整えながら見送った。

理世が一番嬉しかったこと。それは、人々の笑顔だった。

井戸端会議をしているおばちゃん達、お母さんに手を引かれて歩いている女の子、親方の後を歩いていく新米大工のお兄ちゃん。

右を見ても左を見ても、皆、笑顔だったのだ。

七年前、理世はこの街から世界中へ旅立ったのだが、その時に見た人々の暗い顔は、今もよく覚えてる。

生気のない目をしていた彼らは、生きる希望を失っているようだった。

当時はまだこの世界に慣れておらず、人々の表情が恐ろしくてたまらなかった。守り人の背に隠れ、私には関係ないと目を背けていたかった。

けれど理世は――守り人の背に隠れることなく、顔を上げて、笑った。

皆の望む「浄化の姫巫女」ならそうするだろうと思っただけ。

本当は、あの時足が震えていたのに。今にも泣き出してしまっただけなのに。

人の目が怖かった。こんな小娘に何ができるのだと、誰もが訴えていたのである。

邪気は目に見えるものではなく、力のある神官にしか、その有無を判断することはできなかった。だからこそ、誰も信じなかったのだ。理世がこの地を旅立った後、緑が豊かになり本当に邪気が消えうせたのだとわかるまで、王都の人々は理世の味方ではなかった。

でも今は、心を閉ざしている人はどこにもいない。皆の目は希望で溢れ、前を向き、必死に汗を流して生きている。

「畑の様子見てこようと思って」

「おっちゃん！ これ、いくらで買い取ってくれる？ 今釣ってきたばっかだぜ！」

「立てつげが悪かったのかしら……来てくれてありがとうね。助かるわ」

街は活気に溢れていた。はにかむ妊婦、やんちゃな男の子、腰の曲がった老婆。誰もが笑顔だった。姫巫女がもたらした平和の上で、人々が笑みを浮かべている。

それがなによりも嬉しくて、理世は街をウキウキと歩き回った。まず、目についた洋服店で、雑踏に紛れるための服を手に入れなければ。城から支給された服は、「きれいなおべべ」とからかわれるくらい浮いていた。これでは、すぐに見つかって連れ戻されてしまうだろう。

勢いに任せて飛び出してきたのはいいが、実の所これからどうしたいのか、理世自身もよくわかっていなかった。

ずっと逃げ続けるのは無理だろうし、そうしたいとも思わない。王城ではなく、他の守り人がいる神殿に匿かくまつてもらおうのもいいかもしれない。いやいや、やっぱり無理だろうと理世は足を止めた。この世界は王家と神殿、二つの勢力で成り立っているという。双方の間には確執があるようで、浄化の旅に出てすぐの頃、守り人達にまとまりがないのもそのせいだった。城から派遣された三人と、神殿から派遣された三人。表面は取り繕つくろいても、内面までは難しい。最初の半年ほどは冷戦の絶えない日々だった。しかし、共に旅をし、庇護ひごすべき存在である理世を通して、彼らは次第に結束を高めていった。

だが、守り人同士はそれでも、王家と神殿の確執は未だに解消されていない。神殿に身を寄せたとして、万が一そのことが王家に知られてしまったら——当然、王家の人間が理世を連れ戻そうとやってくるだろうし、神殿側と衝突して争いに発展する恐れだってある。やはり、どちらにも頼るわけにはいかない。

だから、もう少しだけ——気持ちが悪く落ちていて、テオバルトの顔を見てもまた笑えるようになるまで。それまででいいから、今は何も考えずに、逃げていたい。

通りかかった洋服店で、吊り下げられている服を見て回る。自分で服を選ぶのは、日本にいた時以来だ。こちらの世界の人間は背が高いので、理世には子供用の服しかサイズが合わない。

「あれがいいかな、と目移りしながら品定めしていく。これまでは、浄化の姫巫女ふさわに相応しい服を誂あつらえてもらうだけだった。既製品なんて久しぶりで、どこか懐かしい。

店主に断り、店の隅のスペースを借りて試着を済ませる。顔を出した理世に、店主が笑いかけた。「お嬢ちゃん、一人でお出かけかい？」

「そう。いざ行かん、冒険の旅よ！」
いつも守り人が選ぶ格式ばった服を着ていた理世にとって、素朴な風合いのブラウスも、動きやすいズボンも、革のブーツも、まるで全てが別世界の衣装に思えてくる。この格好で、一人で旅に出かけるんだ。そう考えるだけで、胸はドキドキと高鳴る。

自分が、恵まれていることは十分わかっていた。
突然やってきた異世界。最初のうちは怯え、戸惑い、呆然とした。しかし理世の周りに、敵はいなかった。突如現れた怪しい人物を、誰もが丁寧に扱ってくれた。たとえそこに利用価値を見出したからだとしても、大切にしてもらった事実は変わらない。

「姫巫女様が世界を浄化なさって治安もだいぶ良くなったが、ここいらはトラブルも多い。あんまり遅くならんうちにお願いしますよ」

「はい」

まさかその「姫巫女様」が目の前には露つゆほども考えない店主に、理世はにつこりとほほ笑んで代金を渡す。そのコインを見て、店主がギョッと目を見張った。

「金貨!? うちじゃ釣りが用意できんよ。もちつと細かいのはないかね?」

「えっ」

理世は焦った。与えられた城の客室から大慌てで持ってきた財布の中には、同じ色のコインしか入っていないからだ。

「じゃ、じゃあこれじゃダメ?」

「こ、こんな大粒の宝石……。お嬢ちゃん、悪いことは言わん。身ぐるみ剥がされんうちに冒険は止めて、家に帰んな」

理世をどこかいいところのお嬢様だと思っっている店主が、渋い顔で首を横に振った。理世は手に金貨と宝石を持ったまま、啞然とする。

理世は浄化の旅を無事こなし報酬として、現金、宝石、そして土地という、三種類の恩賞を受け取っていた。当初は現金と宝石のみで与えられる予定だったが、理世がテオバルトとの結婚を望んでこの地に留まることとなり、それならば土地も、と旅慣れた吟遊詩人が国王に進言してくれたのだ。

右も左もわからない理世のために、守り人達は全てを手配してくれた。多額の現金と宝石は信頼できる場所に預け、土地は指一本動かさなくても、自ずと金が生まれる仕組みに。理世は手元に残った金を受け取るだけでよかった。

浄化の旅では、守り人達が何もかも面倒を見てくれた。そのため理世は買い物一つ満足にでき

ない。

「じゃ、じゃあこれ、砕くから!」

「あーっ、待った、わかった。かき集めてくるから、お嬢ちゃんはそこに座って待ってな。おい、母ちゃん! 水でも出してやってくれ!」

気のいい店主は店の奥に向かってそう叫ぶと、エプロンを脱いで外へ出た。近所の商売仲間に頭を下げている姿を見て、理世はついさっきまで浮かれていた心が深く沈んでいくのを感じた。

「どうしたってんだい、あんなに慌てて……。はい、お嬢ちゃん。水だよ」

「おぼちゃん、ありがとう」

店主に呼ばれた夫人が、コップをお盆に載せてやってきた。理世はコップを受け取り口をつける。私のせいでご主人が頭を下げているんです、と告げることができずに俯く。

この金貨一枚に、どれほどの価値があるのか。七年もこの世界にいたというのに、想像すらつかない。

姫巫女として世界を浄化し、人の役に立てたと思った。けれどこの世界を、この世界の人々を何も見ていなかったのだ。

落ち込む理世のもとに、店主が戻ってきた。汗をかきながら、申し訳なきように頭をかいている。「どうしたんだい、あんた」

「それがなあ」

釣り銭が不足している経緯を告げられると、夫人は理世と店主を順に見て、大げさに溜め息をついた。

呆れられた。叱責されるかもしれない。肩を震わせ身構えた理世に、夫人が声をかける。

「お嬢ちゃん、あんた前に着てた服はいるのかい？」

「え？ 服……？」

これ？ と理世はたたんでいたものを手に取った。その仕立ての良さは素人が見ても一目でわかる。「またいいもん着てるねえ。上着一枚でも釣りを出さなきゃいけないくらいだ。それ、いらぬんならおあしにするけど、どうだい？」

理世はその提案に飛びついた。迷惑をかけたお詫びに、と着ていた衣装一式を押しつける。

「さすがに全部はもらえないよ。手袋一つで十分だ」

「いいんです、落ち着いたらまたお札に伺いますから……おじちゃん、おばちゃん、本当にごめんなさい」

へこむ理世に、店主と夫人は明るく笑った。

「気にしないでいいから、また何かあったら来なさい」

訳ありげなお嬢様に優しい言葉までかけて見送ってくれる二人に、理世は手を振って別れを告げた。自分が無知なせいで、人に迷惑をかけてしまう。その事実が、恐ろしくてたまらなかつた。

二時間後——理世はキュルルと鳴る腹に手を当て、看板を見上げていた。

フォークとコップの絵が、ここは食事処だと主張している。もう少し厳密に言えば酒場である。

旅の途中、何度も守り人と大衆食堂へ足を運んだ。何も躊躇する理由はない——はずだった。

しかし、服屋での出来事がずっと頭の中で繰り返されている。

店に入る勇気を、理世は失っていた。また先ほどのように、何か問題を起こしてしまったら。そう思うと、足がすくむ。

十四歳から七年間。常に人に導かれてこの世界を歩いてきた。今なら一人で歩けると思っていたけれど、自分だけで生きていくのは難しいと、強く感じる。

あたりは薄暗く、夜が近付いていた。朝から何も食べていないため、理世の腹は切実に食料を求めている。店から漂う香ばしい匂いにそろそろ限界だ。

店先に立つてどれぐらいたっただろうか。空腹のまま旅に出るか、腹ごしらえを済ませてからにするべきか。いい加減に決めなければ、と焦る理世に、ふと影が落ちる。

驚いて顔を上げると、厳ついおっさんが二人、理世を覗き込んでいた。

「おうおう嬢ちゃん、こんな場所に一人とは、ちよつと不用心じゃねえか。身ぐるみ剥がれても文句は言えねえぞ」

「おっちゃんが送ってやろうか。うちはどこだ」

理世は瞬時に固まった。

「それとも、そんなちっこいうちから男の味でも覚えに来たか、ああ？ おっと、お前ら、何見ているやがる!?」

場違いな理世に興味津々だったのだろう。いつの間にか大勢の男性客達が、店の窓に顔を押しつけて、競うようにこちらを見ていた。そんな彼らをおっさん二人は睨みつける。

二人は筋骨隆々の、山賊のような出で立ちだった。片方の男は顔中に無精髭を蓄え、伸び放題の髪を後ろへ撫でつけている。もう一人は、スキンヘッドに眼帯。

ついていったら、殺される。もしくは、売られる。

理世は冷や汗をかいた。そういえば、気のいい服屋の店主が、遅くならないうちに帰れと心配してくれていた。あれはこういうことだったのか。

「おい、嬢ちゃん！ 大丈夫か!?」

顔面蒼白になり黙ったままの理世を見て、スキンヘッドの男がぐんと顔を近づけて大きな声を出す。こんなに至近距離で男と会話をしたことなど一度もない。理世はそれほど、初心だった。

青ざめた顔に鳥肌まで加わり、逃げ出すこともできない理世の腕を、誰かが強く引いた。

「こんなところにいたのね。心配して、探し回ったじゃない。一人で動いちゃ駄目って、姉さん言ったでしょ」

え、誰？ 理世は目を見開いて振り返った。

そこには、酒場の窓から漏れる薄暗いライトの下でさえ、ステージに立つトップスターのように



光り輝く美女がいた。自分に向けられた眼差しまなざしの強さに驚きながらも、理世は彼女から目を離せなかった。

「ほら、しゃんと立って。——あら、このお二人は？」

美女が、おっさん二人に目をやった。彼らは、突然現れた美女を前に戸惑っているようだ。

「……あ、ああ。あんたが姉ちゃんだって？ 本当かい？」

おっさん達は、厳いつい顔に不釣り合いな優しい声で尋ねる。理解が追いついていない理世は、何がなんだかわからないままその光景を見ていた。

「ええ。この通り年が離れてるから、両親が甘やかして育てちゃって……」

「ああ……そうか、ならいい。あんまり夜遅くまで、こんなチビを歩かせるなよ。女と見たら誰でもいいって男はわんさかいるんだからな」

途端に、「はい！ はい！」と、酒場の客達が手を挙げた。が、おっさんがひと睨にらみして黙らせる。

「あらいやだ。こんな初心うぶな子にそんな台詞せりふ、聞かせないでよ。けど、ありがと。ほら、帰るわよ。お礼言って」

「あ、ありがと、ございました……」

美女に促うながされるままお礼を言う理世を見て、おっさん達は大きく笑う。もしかしたら、彼らは悪い人ではないのかもしれない。しかし理世には彼らの笑顔が凶悪に見えてしまい、すぐみ上がった。

「さあ、行くわよ」

有無を言わず、美女は理世を連れ出した。腕を引つ張られて、ただふらふらとついていく。

しばらく歩いて、街の喧騒けんそうからは随分ずいぶんと離れた場所で美女が足を止めた。

灯りも乏とほしく、闇は深さを増している。美女は振り向きざまに、大きな大きな溜め息ためいきを落とした。

「——あなたは、なぜあんな場所に……野蛮な男達にまで絡まれて……私があの場合にいなかったら、どうするおつもりだったのです？」

女性にしては低く、男性にしては高い声。とても心地がいい。ここにいるはずがない、大好きなあの人の声に、よく似ている。

月明かりにぼんやりと照らされた彼女が、理世には光り輝いているように見えた。

先ほどは動転していたため気付かなかったが、女性にしてはかなり背が高い。体つきもしっかりしていて、戦いをなりわいにする者の姿に見えた。冒険者か、騎士だろうか。

理世は彼女を見上げて聞いた。

「あの、すみません、どこかでお会いしたことが……？」

美女は息を呑んだ。訪れた沈黙に、理世は肩をすぼめる。

「誰かもわからないのに、ここまでのうのうとついてきた、と……？」

美女が頭を抱え、何やら獣けもののように唸うなっている。理世はどうすればいいのかかわからず、その場にぼつんと立ち尽くしていた。

ややあって、美女は安堵したとも取れる吐息をこぼした。

「いえ、あなたのように年若い女性が一人であんな場所にいるのを見かけたものだから——心配でつい、連れ出してきてしまったの」

怖い思いをさせたのなら、ごめんなさい——そう言っただおやかにほほ笑まれ、理世は首を大きく横に振った。

「私のほうこそすみません。心配してくださって、ありがとうございます。お世話になりました。

えっと、酒場にいたのは……実は私、これから旅に出るんです。それで先に、腹ごしらえをしておこうと思って——」

「……旅？」

理世の言葉を遮った彼女の声は、先ほどよりもずっと低い。

しかし次の瞬間には、元に戻っていた。

「なぜこのような時期に？」

「えっと、まだ暖かいですし、寒くなる前に……」

美女はしばし逡巡する様子を見せたが、やがて真剣な顔で理世を見据えた。睨んだと言えるほど、強い目力だった。驚いた理世が一步引く前に、目の前で片膝をつく。

美女の表情は真剣そのもの。ひどく切羽詰まった様子にも感じられる。自分を覗き込む顔を見て、理世の胸が高鳴った。

あれ？ なんだか——

「一人旅は危険がつき物。私は王国で騎士をしていたのだけれど……折よく今日から暇をいただけたの。もしよければ、女二人、気ままな旅はいかが？」

「……え？ あ、でも」

「先ほどのような時、一人で切り抜けられるの？」

「それは……。でも、どこに行くかもまだ決めてない、当てのない旅ですから……。申し訳なくて……」

「当てのない旅……。特に、目的もないと……？」

「はい」

美女は打ちひしがれ、何かを呟く。そして一度きつく目をつぶったかと思うと、小さく頭を振って再び理世の顔を覗き込んだ。

「——私は、婚約者と仲違いをしまして。頭を冷やす時間が必要だと思って暇を願ったの。腕は立てども、一人では心が荒む。どうかそばで、私を明るく照らしてはくれませんか」

その言葉に吸い寄せられるように、理世はこくんとうなずいていた。

「よかった、ありがとう……。私はテレーズ・コルネリウス」

どこかで聞いた名だな、と理世は思った。

「あなたは？」

「あ、はい。私は在澤理世といいます」

「アリスワ……。アリスって呼んでもいいかしら？」

この世界の人はやっぱりそう呼ぶんだ。七年間で愛着の増したあだ名。理世は笑顔でうなずいた。「さて、と。当てのない旅と言ってたけど……。次の行き先の候補はあるの？」

美女の言葉に、理世が首を横に振る。

「いえ、まだ何も……」

「そう。ゆっくり決めればいいわ。夕食は？」

「それも、まだ……」

「じゃあ、まずは明日の予定を決めるところからね。何か買って宿に行きましようか」

「えっと、実は宿もまだ……」

申し訳なさの余り、理世はうなだれる一方だった。

「旅に出る」などと息巻いておきながら、一人では何もできない自分がひどく恥ずかしい。

しかし、テレーズは理世の不甲斐なさを気にするどころか、落ち込む理世に助け船を出した。

「大丈夫よ。けど、もう日が暮れて結構たつから、急いだほうがいいわね。まだ空いてそうな宿に心当たりがあるわ。そこでもいい？」

理世はうなずいて彼女の後を追う。テレーズは長い足には不似合いなほどゆつくりと歩いた。この世界の住人は男女ともに背が高く、足が長い。守り人達も理世に歩調を合わせるよう気遣ってく

れていたが、早足で追いかけることも多くあった。

テレーズの優しさに感謝しながら後をついていく。

途中、屋台で肉や野菜が包まれた肉まんのような軽食も買った。渡されたそれを、宿に向かいながら頬張った。はふはふとおいしそうに味わう理世を見下ろしたテレーズが、一瞬目を見張る。

先に食べちゃ駄目だったかな？ と不安がる理世に気付いたテレーズは、苦笑して同じようにパクリと肉まんもどきにかぶりついた。少し行儀悪くも、二人揃って食べながら歩き続けているうち、目指していた宿屋に着いた。理世は促されて中に入る。

「いらつしゃいませー」

「まだ空いてる？」

「ちよっと割高になるんですけど……一部屋なら空いてますよー」

カウンターにいた受付の女性がにこりと答える。

振り返ったテレーズに「同じ部屋でも？」と聞かれ、理世は「もちろん」と返事をした。

「じゃあそれで」

「毎度ありー」

差し出された帳簿の記入欄も、テレーズがすらすらと埋めていく。

理世は、テレーズがいてくれてよかったと、心から感じていた。

テレーズに旅の同行を求められた時、正直に言えば断りたかった。

思いっきり泣きたいがために城を飛び出したのだ。そんな失恋旅行に、気を遣わなければならぬ初対面の同行者など、欲しいわけがない。

しかし、服屋で自分の無知を知り、酒場にすら入ることができなかった理世にとって、旅慣れたテレーズはとても心強い存在となった。あのまま一人でいたら、空腹のまま野宿を強いられていたことだろう。

日本にいた時、理世はまだ子供だった。一人で買物をしたり電車に乗ることはあっても、自らの手配をしたり、食事処を見つけないことはまずなかった。それはこの世界でも変わらず、それこそ守り人におんぶにだっこ状態。

城を出るまで、一人で旅ができると思っていた。世界を救った自分なら、なんでも簡単にこなせると――

再び落ち込む理世に、テレーズが声をかけた。

「どうかしたの？」

「大丈夫。なんでもないよ」

にこりと笑って理世が首を振る。

「そう？ 何でも言ってるね、これからは旅の仲間なんだから」

「ありがとう。テレーズがいてくれて心強いなあって、すごく思ってる」

テレーズはよくわからないという風に、笑って首を傾げた。

「はい、ご記入ありがとうございます。こちらで結構です。お部屋はこの階段を上って、右側の一番奥にあります」

理世とテレーズは受付嬢に見送られながら部屋へ向かう。二人とも、荷物と呼べる物はほとんどない。理世は詮索されるのが嫌だったため、テレーズにも詳しい事情を聞けずにいた。

部屋には、簡素なベッドとテーブル、そして椅子が一脚備えつけられている。理世はそのベッドを見て唸った。

「二人で寝るには……狭いかな？」

「寝ないわよ、一緒には」

テレーズは笑って腰に手をやり、剣を下ろした。

「え、じゃあどうする？」

「私は床で寝るわ」

理世はぎょっと目を剥いた。床に寝るって――守り人かよと突っ込みたいのを必死に我慢する。

「いやいやいや、何言ってるの！ 駄目でしょ、テレーズは女の子なのに！」

驚きの余り、理世は思わず素っ頓狂な声を上げる。声高に叫ぶ理世に、テレーズは笑った。

「女の子って……そんな年じゃないわよ」

くすくすと笑みをこぼすテレーズは美しいけれど、今は見惚れている場合ではない。

「テレーズが床で寝るくらいなら、私が椅子で寝るよ！ ほら、小さいし！」

「それこそ何言ってるの。大丈夫よ、私は——騎士だからこういうのにも慣れてるわ」

一方の理世は、こうした扱いをされることに慣れていた。

腐っても、姫巫女。子猿でも、姫巫女。

七年もの間、理世は姫巫女として六人の守り人達によつて大事に守られてきた。

いつも、どんな場所でも人の手と目が離れることはなく、常に誰かがそばにいる生活。眠る時はもちろん、守り人一人が同室で夜番を務めていた。

けれどそれは、彼らが全員男性だったからである。こんな初対面の美女にまで、床にひれ伏してもらうわけにはいかない。

「いや、それは駄目。美女は世界が平等に、大事に扱うべきだよ」

「アリサ……?」

「ん? 何?」

「……いえ」

頑なな理世の言動に、テレーズは驚いたらしい。

そういえば、こんな風に素の自分を出すのは久しぶりかもしれない。皆が求める、浄化の姫巫女^{かみ}でいた自分は、常に相手がどういふ言葉を求めているのか見極めて、理想的な姫巫女を演じ続けていた。皆が求める「アリサ」なら、きつとこんな言葉は吐かない。それを、初対面のテレーズの前で口にするなんて——理世は自分に驚いていた。

いや、初対面だからこそ曝け出せたのだ。

今までの自分は、王城に置いてきた。ここにいるのは、浄化の姫巫女^{かみ}じゃない。

ありのままの在澤理世だ。

「私、ただの小娘だよ。テレーズを床で寝かせるような身分の人間じゃない」

「——たとえそうだとしても、騎士という職業柄、女性を椅子で寝かせるなんてできないわ」

あーもう! 騎士、騎士、騎士!

護衛として賃金を支払い雇っているわけでもないのに、騎士という生き物は、万物^{ばんぶつ}を等しく甘やかす性質らしい。

そんな風に優しくするから、そんな風に特別扱いするから、勘違いしちゃうんじゃないか。

理世の脳裏に、騎士テオバルトの姿が浮かぶ。

理世はテレーズが言わんとする騎士道精神が、大嫌いだった。

「じゃあ私は今から妖怪『ベッドジャンナイノジャー』になるので、ベッドでは寝ません」

「……妖怪は今この場で退治したので、アリサはベッドで寝ましょう」

適応力の高い騎士は怯まない。

「床は駄目!」

「いいえ、最善よ」

決してうんと言わないテレーズに、理世は頭を抱える。

守り人達は、基本的に理世の嫌がることはしなかった。けれどそれは、護衛のためにはどうしても譲れない彼らの境界線を、「アリサ」が踏み越えなかったからだろう。

「どうしても？」

「どうしても？」

「なんで？」

「私が……騎士だからよ」

決して引かないテレーズに、理世が折れた。

「よし、わかった。テレーズ、私の護衛をしてくれない？ もちろんちゃんと賃金はお支払いする。相場とかはちよつとわかんないけど……教えてくれればそれに倣うよ」

突然持ちかけられた護衛契約は、テレーズを驚かせた。

「それはもちろんいいけれど……。契約なんてしなくても、最初からそのつもりだったわ。だって私は騎士で、あなたは——非力な女の子なんだから」

「うん。その通り。けど何かができるからつて、当然のようにやつてもらのはちよつと違うよね。それをお願いするなら、きちんと相応の対価を支払うべきだ」

浄化の力はある。しかし邪気が存在しなくなった今、その能力はなんの意味も持たない。理世は邪気のない世の中では、ただの非力な小娘でしかないのだ。

「そういうのは必要ないと思ってたけれど……アリサがそう言うなら」

アリサの強い断定口調に戸惑ったのか、テレーズは引き下がったように言った。

「オッケー。じゃあ、契約の金額は追々決めるとして——テレーズ！ 私、契約主だから！ 床で

寝るのは禁止です！」

「大変申し訳ありませんが、その命令には従えません」

にこつとほほ笑んだテレーズに、理世は「えっ!?」と叫んだ。

「そういうことだったのね。なんでそんなに必死なのかと思ったら」

「テ、テレーズさん!？」

主導権を握れると思っていた理世は、にべもないテレーズの対応に狼狽する。

「私はあなたを守ると、そう決めて旅の同行を願い出たの」

「守るためなら床で寝なくてもいいと思うんですけど……」

「私、寝相が悪くて、椅子で寝ると落ちちゃうから」

意外な告白を聞き、「えっ、そうなの？」と理世はぼかんと口を開く。

「ええ。さあ、この話はもうおしまい。それよりもアリサ。体を拭くための湯をもらってくるから、決してこの部屋から出ないように」

「はい」

「誰が来ても、何があっても、絶対にドアを開けたら駄目よ」

守り人から聞かされたお小言と似ているな。理世はベッドに転がりながら、手を上げて「はー

い」と返事をした。テレーズはそんな姿を見て溜め息をこぼすと、部屋のドアを閉じた。ガチャン。鍵を回す音がして、理世が振り返る。

「か、鍵までかけるか……」

心配性だなあと呟き、理世はベッドに突っ伏した。

なかなか立派な騎士っぷりだ。初対面の相手を簡単に信用するなんて、守り人達にはしこたま怒られるかもしれないが、理世は彼女の人間性と職務に対する実直さに好感を持っていた。

なぜなら、守り人達を思い出させるからだ。

彼らは皆、優しかった。それは、理世が目に見える成果をもって、世界に救いをもたらしていたからだろう。

とはいえ、理世の意志を優先した上で彼女を律し、正しいほうへと導き続けてくれたのは事実である。理世はそのことに——見知らぬ世界で自ら舵を取らなくていいことに、途方もなく安心していただのだ。

しばらくして、テレーズは湯を張ったタライを手に戻ってきた。テレーズが後ろを向いている間に、理世は濡らしたタオルで体を拭き上げる。

「先にいただいちゃってごめん。テレーズもどうぞ」

「私はお湯を頼んだ時、ついでに済ませてきたから」

早技だと理世が驚く姿も気にせず、テレーズはタライの湯を窓から捨てた。

「さて、明日からの予定を立てましょうか」

「はい」

理世はベッドに、テレーズは椅子にそれぞれ座り、テーブルに地図を広げる。

「当分のない旅と言ったけれど……何かしたいことや、行きたい所はあるんでしょう？」

まるでさすがのような目でテレーズに尋ねられ、理世は目を逸らした。

「えっとお……本当に、なんにもなくてえ……」

「……そうね、そういうことも、あるわよね」

「そうなのさなの……。したいことや行きたいところ、かあ」

困ったという思いから首をひねった。テオバルトに恋人がいるとわかり、子猿と言われたショックから衝動で飛び出してきたはいいものもの——行きたい所もやりたいことも、本当にない。

こんなに主体性のない人間だったのかと自分で悲しくなる。日本にいた時、高校受験を翌年に控え、将来の夢を考えるよう担任の先生に言われた時と同じくらい、何も思い浮かばない。

「……テレーズは？ やりたいことあるでしょ？」

「私は……少し考える時間がほしかっただけだから。理世に任せるわ」

契約者についていくのが、護衛の仕事だし。そう言うてにこりとほほ笑まれ、結局、行き先は理世が決めることとなる。

「うーん、じゃあ、そうだなあ」

何をしたいのか、ではなく、何をされたくないのかを考えてみる。まだ、城に連れ戻されたくない。神殿も同様だ。万が一知り合いに見つかれば、連れ戻されるかもしれない。それだけは避けたかった。

「どこか景色のいい場所に行きたい！」

本当は、景色のいい場所なんて、七年間の旅で十分に見て回った。世界の観光名所も、訪れていない場所のほうが少ないだろう。けれどこんな適当な理由しか、テレーズを連れ回す方法が思い浮かばない。

「そうね……じゃあゼニスはどう？ 港町から見る夕日、素敵でしょう？」

「ゼニス？ 行きたい！ あれだよ、いっぱい市場とか広がって、物がたくさん売ってる場所」

「ええ、そうよ」

「あそこ、前に一度行ったことがあるんだけど、時間がなくて回れなかったからさあ。もう一回行きたいなあって思ってたんだ」

両手を広げて「やったー！」と喜ぶ理世を、テレーズは目を細めて見つめていた。

「んじゃあ、行き先も決まったし寝よっか」

日の出と共に起き、日付が変わる頃には寝る生活にすっかり馴染んだ理世。そろそろ彼女はおねむの時間である。あくびを噛み殺してそう言うと、テレーズは大きくうなずき、床に座る。

「あつ！ 床で寝るのは駄目だって！」

しかし、何を話しかけても、つついても、揺らしても、おねだりしても——剣を抱えてベッドのそばに座り込んだテレーズが、理世の要望に応えることはなかった。

朝日を浴びて目が覚めた。理世はベッドの上に体を起こすと、うんと伸びをしてから目をこする。硬いベッドで眠ったのは久しぶりだ。姫巫女として旅している間は、ここよりも高級な、ふかふかのベッドがある宿に泊まることがほとんどだった。部屋は明るく、燦々と太陽の光が降り注いでいた。室内は簡素ではあるが清潔感があり、好感が持てる。部屋の様子を窺おうと首を回して、理世はヒッと息を呑んだ。

人の後頭部が、床から生えている。

すぐに昨日の出来事を思い出し、そうだったと息を吐いた。

こういう光景を見るのは初めてではない。浄化の旅をしている最中、守り人は椅子やソファを寝台代わりにしていたし、それがなければ、ベッドの脇に座って眠っていた。ただし、彼らの中でただ一人——テオバルトだけは、どんな部屋であっても、最初から必ず床で眠ることを選んだ——理世はその記憶を意図的に頭から排除する。

朝日に照らされてさらに美しく輝くテレーズは、片膝を立てて眠っている。同じくベッドの上でしゃがみ込んだ理世は、膝頭に肘を置き、静かな寝息を立てる女騎士を見つめた。

こんなにきれいな女性が床の上で寝るなんて。プリティチャーミングな乙女を「子猿」とのたまうどこかの誰かさんならともかく……と、理世は彼女の体を心配する。

「起きたの？」

ぼんやりしていた理世はドキリと震えた。起き抜けのテレーズの声は、昨日よりもずっと低かった。それは、理世にとって今一番、聞きたくて、それでいて聞きたくない相手の声に似ていた。

「こんな見苦しい格好で……ごめんなさいね。支度をしましようか」

ほほ笑む彼女の声は、昨晚と同じ高さに戻っている。

——彼女の口調では、間違えようもないはずなのに。

どれほど、求めているのか。どれほど、未練たらしいのか。理世は自嘲じちやうした。

各自身支度を整えると、少ない荷物を持って階下に向かう。

「おはようございまーす。ご朝食はいかがですか？」

別途料金がかかりますけど、と受付嬢に話しかけられた。

理世は違和感のないように、彼女の視線から逃れるためテレーズの背後に隠れる。直後、ハツと気付く。これは受け答えを最小限に抑えるための、「アリサ」の癖だ。自分で返事をしようとテレーズの背から一歩踏み出そうとして——足が動かなかった。

「食べていこうかしら……アリサ、何か好きな食べ物はある？」

「あ、えっと。カブのスープが好き」

テレーズに聞かれ、理世は慌てて答えた。

「カブですかー。時期的にちよつと厳しいですね。スープだと、今日はナスがありますよ。そっちもおいしいんで食べてってくださいよー」

七年もこの世界にいながら、未だに野菜の匂すら一つも知らない。恥ずかしくて、理世は黙つてうなづくことしかできなかった。

食堂は受付カウンターを過ぎた所にあつた。すでに他の宿泊客も数人来ており、思い思いに料理を口にしている。がやがやとした話し声や朝の光が、食堂を明るく彩いろどっていた。

席に着くと、食堂の奥から宿屋の主人がお盆を二つ持ってやってきた。受付嬢の父親だろう、顔がそっくりだ。テレーズが袋から取り出した銅貨を差し出すと、主人はそれを受け取り、二人の前にお盆を置いて立ち去った。

「温かいうちに食べましょう。いただきます」

「いただきます」

スープを口に含むと、野菜の甘みが広がっていく。

「ねえ、テレーズ」

「どうしたの」

理世はどう伝えていいのか迷い、もう一口スープを飲みくでした。

「お金のことなんだけど」

「ええ」

護衛の契約金については、朝のうちに渡してある。理世の持っている金貨で対応できたのでほっとしていたのだが、これから先、難しい局面も出てくるだろう。

「もし可能なら、テレーズにお金の管理を任せたいんだけど……」

「アリサがそれでいいなら、私はかまわないわ」

「ありがとう、じゃあ後で渡すね」

理世は胸を撫で下ろした。よかった、これで自分で支払いをしなくて済む。

だがすぐに、そんな気持ちも浮かんだことに落ち込む。嫌なことから逃げて、逃げて、最後は一体どこへ行くんだろう。

「アリサ？」

「なんでもない。おいしいね、ナスのスープも」

にこりと笑う。笑うことなら、得意だった。

* * *

「ねえ、テレーズ、こんなにいららないよー」

「まだよ。こっちのサテンも、あっちのチェリーピンクのチュニックも合わせてみましょう」

「ええええ！ 真っピンクは勘弁して……！」

王都にある仕立て屋の一室で、理世はマネキンと化していた。

テレーズは鼻歌でも歌い出しそうなほどの上機嫌だ。店員と一緒にあって、引つ切りなしにあれもこれもと服を合わせてくる。理世はただ直立不動で、テレーズと服を交互に見るしかなかった。

「やはりテレーズ様のセンスは素晴らしいですわ。そちらには、この新作のボレロなんかを合わせられても……：レースが美しいんですよ」

「ええ、素敵ね。これはどう？ アリサのきれいな黒髪には、ハッキリした色が似合うと思うの」
意気投合する店員とテレーズ。理世は、二人の間に入ることを放棄した。

ここはテレーズの馴染みの店らしい。パステルカラーの壁には優美な模様が描かれ、石膏の柱には緻密な文様が彫ってあった。二人は、壁に飾られている様々なデザインの衣服を手にとって、色も種類も豊富な布との相性を確かめている。

理世が昨日入ったような庶民向けの店ではない。

姫巫女だった時、着ていたものは上等だったが、こういう場所に理世自身が赴いたことはない。最初は物珍しさから呆けたように眺めていたが、五着目が過ぎ、十着目が過ぎた頃には——理世もさすがに飽きていた。

「こちらなんて、先月お姉様にご注文いただいた商品とお揃いのデザインですよ」

「えっ。うちの姉、また注文してたんですか？」

ウキウキと洋服を選んでたテレーズの手が止まる。

「ええ。テレーズ様の無事の帰還を祝って、十着ほどご注文いただいております」

「……その言い方だと、他の店でも……頭が痛い……」

何言ってるんだ、今まさに同じことを私にしているじゃないか。と理世は溜め息をついた。

「テレーズ、私ももう十分なんだけど……」

「そうね、じゃあ最後に、これとこれならどちらが好き？」

「両方ともあんまり好みじゃない。私、その白い襟のと、こっちのバイカラーのが好き。邪魔になるから、羽織はおりはいらない」

きっぱり、はつきり理世は選んだ。好みというよりも、その二つが一番動きやすそうだったのだ。

「あと、下はグレイのパンツがいい。合わせやすそうだし。あとは二着テレーズが選んで。もうそれで終わりにしよう」

理世の言葉に、テレーズは目を見開いた。どうしたのだろうと不安になって首を傾げると、小さく笑う。

「いえ、とても素直に自分の意見を言えるんだなと思って……」

「そりゃあ、全身真っピンクにされちゃたまんないもん」

その言葉にテレーズは少しだけ目を伏せた。

それを見ながら理世は、姫巫女の時もは守り人が用意するものをただ着ていただけだったなと思いつ返す。日本で制服文化に慣れてた理世にとつて、それはさほど息苦しいことではなかった。しかし、こうして自分で選ぶというのはやはり楽しいものがある。

できるだけ派手にならないような色合いのものを選んだが、仕立ての良さまでは隠せない。ちぐはぐになるうとも、昨日買った服も大事に着て行こうと、理世は荷物をしっかりと握った。

「またのご来店、お待ちしております」

結局大量になった服をリュックに詰め込んで店を出る。

宿屋の受付嬢とは格の違いを感じさせる、仕立て屋のお姉さんのお辞儀。理世は少し迷った末に、小さく手を振る。彼女はそれに気付くとにこりとほほ笑み、手を振り返してくれた。

「よく似合ってたわ」

笑顔で見下ろすテレーズに、理世も大きく笑ってうなづく。

「ありがと……楽しかったなあ。こういうの、久しぶりだったから」

この七年、理世を囲むのは男ばかりだった。守り人達ひとを兄のように感じ、親しみを持っていたが、やはり男と女は根本的に違う。男性とこんな風に服を楽しく選ぶなんて、絶対に無理だろう。そう考えると、こうして日本にいた頃のように楽しい女子トークができる時間は、非常に貴重で、とても懐かしい。

そういえば、怯むことなく自分の意見が言えたな。

店員との会話には及び腰になっていたのに。理世は不思議に思った。女の子同士の気軽なシヨッピングだったからだろうか。相手がテレーズだから言えたのかもしれない。

「……さつき言ってた、姉の話なんだけど」

理世はテレーズを仰ぎ見た。テレーズは言いにくそうな顔で理世を見下ろしている。

「年が離れてるせいで、ことさら私をかわいがってくれて……ずっと、妹を欲しがっていて、私が生まれてからはかかりきり。母よりも乳母よりも、姉が私の世話をしてくれていたらしいの」

乳母がいるのか。あんな店の常連だから、そこそこいい家庭の出なのだろうとは思っていたが——まさかの本物のお嬢様に、理世は少しだけ腰が引けた。

「だからなのかしら。昔から姉の頼みごとには弱くって……。いつも、これで終わり、これでおしまいって言うんだけど。口ばかりで断り切れないことを知ってるから、姉も強気なのよね」

「優しいんだね、テレーズ」

テレーズは苦笑を浮かべた。

「突然、変な話をしちやっただわね。私、どうしたのかしら。アリサも着せ替え人形にしちやっって、ごめんさい」

「いいのいいの。私は楽しかったし」

理世は重いリュックを背負い直すと、大きく手を振る。その様子を見て、テレーズはふわりと優

しく笑う。

「……私もとても楽しかった。いつの間にか姉の趣味がうつってたみたい。こうしてあなたに似合う服を選んであげたいって、ずっと思ってたの」

「ずっと?」

テレーズの垂麻色の髪が、空の青によく映える。

「ええ、出会ってから——ずっと」

伏し目がちにそう言ったテレーズがあまりにも美しく、理世は言葉を失った。人の流れに逆らうように、大通りで足を止めている二人を、人々が不思議そうな顔で見ながら通り過ぎていく。

顔を上げたテレーズは、人々を見て一拍呼吸を止め、理世の手を握った。理世はテレーズの手の力強さに、胸を高鳴らせる。

長身のテレーズの背にすっぽりと隠れてしまうほど理世は小さい。

もしかすると、テオバルトと同じくらいテレーズは背が高いかもしれない。——そう思ったと同時に、理世は我に返った。

どこか精悍な印象を受けるテレーズに、あの人の面影を感じ、見惚れてしまった。理世は、自分に活を入れる。女性であるテレーズに、彼を重ねてどうするのか。理世は心に蓋をした。

「行きましようか」

「うん」